

# そよかぜ通信

■巻頭言

## 今、先生方に話したいこと ..... 2

東北福祉大学特任教授 有田 和正



## 総合は本当に大変!?

～本質を考える授業研究からの提言～ ..... 8

北海道函館市立磨光小学校教諭 阿部 智

総合的な学習の時間

## 単元カリキュラム ワークショップを 校内研修でやろう

～その必要性と可能性～ ..... 12

東京都杉並区立杉並第八小学校主幹教諭 畷尾 宏明

## 「子どもたちの学習意欲を 引き出す5つの方法」

～プロジェクト学習の実践から学んだこと～ ..... 16

熊本県菊池市立迫水小学校教諭 富永 泰寛



“授業の神様”にも、「自分は教師に向いていない」と何度も辞めようと思ったことがあった…  
有田先生の素顔、授業・教材作りの原点についてご寄稿いただきました。

# 今、先生方に話したいこと

—私の教師生活を通して—

東北福祉大学特任教授  
有田和正



## 1 出会いを生かす心

私が教員として採用された学校は、24学級もある大規模校なのに、新採は一人だけだった。校長は、4月に初めて校長になった方で、暇があれば、私の教室にブラリと現れ、いつの間にかいなくなる。

校長が教室に現れた後には、必ず用務主事さんが「時間がとれたら校長室に来るように」という紙切れを持ってこられた。恐る恐る校長室に行くと、「誤字がある、脱字がある、言葉の遣い方が間違っている」といったことから、「内容がおもしろくない。教材研究が足りない、もっと笑顔で楽しく教えなさい」等々、多岐にわたっての指導が1年間続いた。

指導を受けるたびに必死で対応した。ゆとりなどあったものではないはずなのに、日曜日には希望の子どもを連れて、自転車で学校近辺を見て回った。あとで考えると、これが社会科の教材研究にすごく役だった。子どもも喜んで、「先生、次は〇〇へ行こうよ」と、要求するようになり、行動範囲も広がっていった。自転車で行けない所は、汽車（当時は汽車であった）に乗って、足を延ばしていった。

指導がまずいのに、子どもたちがよくついてきて、楽しい学級ができていったのは、この子どもたちとの交流があったからだろう。今の先生方はあまりにも忙しく、とても、こんなゆとりはないだろう。しかし、「時間は創るもの」で、「あるもの」ではない。このことを考えて欲しい。

40歳で筑波大学附属小学校へ転勤になった。この時も4～6年の最初の3年間は、隔週土曜日（休日であった）ごとに、電車とバスで東京のあちこちを見て回った。このことを知ったある出版社が「3年間、見て回ったことを本にしませんか」と

言ってくれた。どこで見ているのだろうかと思議に思いながら、『学校の門を開いて』（国土社）という本にまとめた。1979年のことである。

つまり「時間を創り出して」子どもたちと共に教材研究を「遊び」として行ったのである。遊びも後で生きるものであることを知った。

私は、「その時、その時を懸命に生きる」ことが大切だと考えるようになった。今いる環境を最大限に生かして、楽しく生きることだと思う。人との出会い、地域との出会い、子どもとの出会いを、与えられたものとして生かすことが大切だと思う。

---

## 2 本当のゆとりの時代があった

---

今まで書いたことも「ゆとり」の時間のような感じであるが、田舎に住んでいたため、自転車通勤していたが、自動車が欲しくてたまらなかった。それで、運転免許を取りに行った。そして、本田のスーパーカブ号を月賦で購入した。天にも昇るほどうれしかった。

今度は子どもたちを連れていけない。パンクの修理法を自転車屋で習い、大分県や熊本県等へ遊びに出かけた。

途中で雨が降ったりするので、四輪車が欲しくなった。トラックを借りて乗ってみたら、みんながよける。道をあけてくれる。オートバイでは、警笛を鳴らしても道をあけてくれない。「よし、今度は大型自動車の免許を取ろう」と思い、試験を受けにいった。当時は実技試験免除の自動車学校などなかったので、どうしても福岡市の郊外まで試験を受けに行かざるを得なかった。やっとのことで合格した。

これでますます自動車が欲しくなり、「スバル360」という軽自動車を購入した。今度は、家族

を乗せて鹿児島、宮崎、佐賀、長崎など、本州では山口、広島あたりまで出かけた。家族だけでなく、同じ学校の先生方とあちこちに出かけた。同級生がいたこともあって、始めは二人で、やがて四人となり、温泉巡りをしたり、神社巡りをしたりした。観光地は全て行った。

釣りにもこった。道具一式を購入し、用務主事さんを先生にして、車であちこち釣りに出かけた。帰りに、友人・知人に魚を分けてあげるのも楽しかった。

車にこり、釣りにこっているうちに、ガソリンに興味をもち「危険物取扱主任者免許状」というのを試験を受けて入手した。田舎にいた20代は、本当に「ゆとりの時代」であった。自分のやりたいことができる時代であった。

ただがむしゃらに勉強するだけでは、よい教師にはなれないように思う。「ゆとり」が人間に幅を与える。「遊び」が人間性を高める。もちろん限度がある。遊び過ぎるのも困るし、年中ゆとりばかりでもよくない。「忙中閑あり」がよいところだ。私の人生の貴重な青春時代であった。古きよき時代であった。

---

## 3 「本物の授業」との出会い

---

—求めていけばいつか出会う—

### ①「発問」との出会い

新採1年めのことである。福岡教育大学附属小倉小学校の渡辺準治先生が、私の勤めていた田舎の学校にこられて、飛び込み授業をされた。

「君たちは、戦争映画がそんなに好きですか。ところで、どんなところがおもしろいですか？」と質問された。ふだん発言などしない6年生の子どもたちが、実に活発に、先を争っておもしろいところをあげていった。機関銃で撃つと人がバタバタと倒れていくところや、爆弾を投げ込むと家

が爆発して人が死ぬところがおもしろい、などという。とにかく、子どもたちの動きは、目を見張るばかりであった。

渡辺先生は、にこにこしながら、しかも、いちいちうなずきながら聞いていた。子どもたちの発言がとぎれたかな、と思った瞬間、低い声で、「バタバタと倒れて死んでいく、あれが君たちのお父さんや、お兄さんだったらどうですか?」と言った。

子どもたちは、ハッとされたようにシーンとなった。しばらくすると、二人の女の子が涙を流していた。あとで担任に聞いてみると、二人は父が戦死したとのことであった。

楽しい雰囲気から、一転して涙を流す場面へー。

今、思い出しても、心憎いばかりの「発問」であった。これこそ「プロの発問だ」と思った。そして、どうしたら、こんな発問ができるようになるのだろうか、と思った。

新採の年、こんなすごい発問に出会ったのは、何とも幸せなことであった。私が発問に目を開かされた最初のできごとであった。

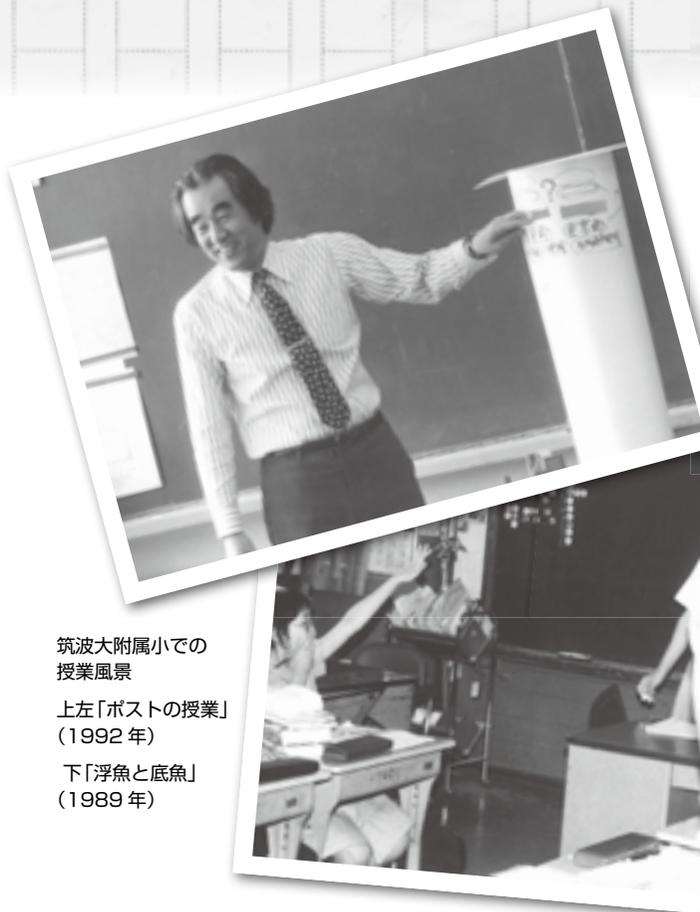
私は、渡辺先生に質問した。「あのすごい発問は、どのようにしたら考えつくのですか?」と。「飛び込み授業だから、子どもはわからない。そこで、徹底的に教材研究する。すると、子どもの動き、考えも予測できる。それに対応して発問を考える。一言で言えば、深い教材研究から生まれる—ということだね」

この言葉は、未だに私の中に生きているし、私の考えのもとになっている。「教材七分に腕三分」という、私の主張のもととは、このへんにあるのかも知れない。

## ②本物の「授業」との出会い

昭和37年、初めて県外の研究会へ行かせていただいた。奈良女子大学文学部附属小学校の研究発表会へ参加することにした。

何を見てよいか目あてをもっていなかったの



筑波大附属小での  
授業風景

上左「ポストの授業」  
(1992年)

下「浮魚と底魚」  
(1989年)

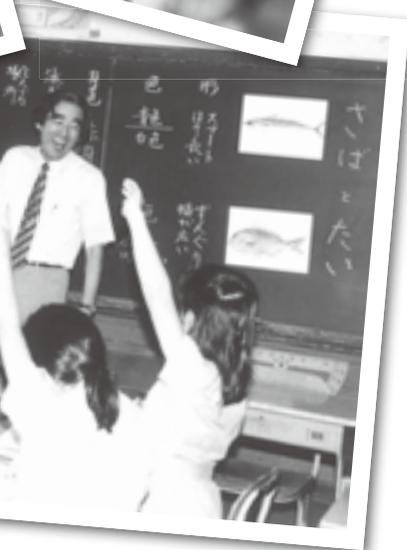
で、1時間めは、ぶらぶら見て回った。印象に残るような、ゆさぶられるような授業に出会えず、がっかりした。2時間め、「しごと」の授業でも見ようと思い、2年生の教室へ行った。人があふれでとても見えそうもない。

そこで強引に中にもぐり込んだ。教室内を見ると、前の方にお世辞にも立派とは言えない手づくりのポストがいくつか並んでいた。指導案を見ると、長岡文雄という先生で「ポストの発表会」ということであった。

### <第1時の学習活動>

- ・グループで作ったポストの模型について発表し、比べ合う。
- ・ポストで、うまく考えて作ってあると思うところをみつけて、そのわけを話し合う。
- ・ポストを開ける郵便屋さんのまねをする。

これが、今から見ようとする授業の指導案で、簡単過ぎて意味がよくわからなかった。その当時、



この指導案を見て、ユニークな授業が展開されることや、指導計画のすばらしさなど、全く読みとれなかった。

授業が始まった。5分も経たないうちに、脳天をぶんなぐられたような強いショックを受けた。そして、感動した。物心ついて以来、これほど感動したことはなかった。私は全身全霊をあげてこの授業に参加した。

吸収しようなんて考える余裕はなかった。

「グループで作ったポストの模型について発表し、比べ合う」というわずか2行の文の内容の豊かさに驚かされた。

子どもたちの発表するポストは、いずれも何らかの欠陥のあるものばかりであった。その欠陥をみつけて、欠陥があるとどのように困るか考え合うのである。

だから、教科書や参考書にあるような一般的なことを言う子どもは一人もいなかった。みんな自分の体験に基づいたものばかりで、実にユニークな発言ばかりで、私はゆきぶられっぱなしであった。

これまで、教材や資料は、完全なものでなければだめだと思っていた。子どもたちがまとめる場合も、完全なもの、正しいものにするよう教師が手を加えなければならないと考えていた。しかし、不完全さは目につきやすい。それを発見させて、どうしたら完全なもの、本物のポストのようにな

るか考えさせることが、子どもの思考の筋道からしても自然であることに気づいた。

教師の発問も、「どうしてこんなとぼけた発問をするのだろうか」と、意表を突かれるばかりであった。子どもの意見が対立すると、「どちらも正しいことにしておく」というのである。すると、子どもたちは大声で「ダメ!」と言う。こうして「ゆびんやさんの仕事の事実を見なければだめだ、よし見に行こう」と思うようにするのであった。

どちらが正しいか教科書には出ていないので、本物を見ないと結論は出せない。生活科の授業もこのようにもっていかなければ、地についた授業にはならないのではないかと。とにかく、「これこそ低学年社会科だ」、いや「本物の授業だ」と思った。

### ③一人の先人を追いかける

ポストの授業に偶然出会ってから、新しい目標が生まれた。長岡先生を追いかけて、追いつくことである。先生の著書は全て集めて読んだ。それも2回も3回も。講演会があるといえば、少々遠くでも駆けつけて聴いた。

何年か努力したが、どうしても進歩した気がしない。そこで年休を取って、1週間、長岡先生のもとで教育実習をやり直した。ふだんどんな授業をしているのか、つぶさに観察して、記録に取った。

印象的だったのは、東海道五十三次の宿場のスライドを、たいした説明もなしに見せたことであった。これで、いったい何の指導をしたのだろうかと思った。ところが、翌朝、驚いた。何人もの子どもが、宿場のことを調べ、文に書いて先生の机上に載せているのである。

先生は、この中の一人分を使ってその日の授業を展開した。前日の布石がみごとに生きていた。そうだ!「子どもが調べたくなるようなスライドの見せ方をしていたのだ」と気づいた。大きな、大きな気づきであった。

## 4 1年に11回の研究授業 —身も心もボロボロになった—

### ①附属小倉小学校へ転出

私が31歳になったとき、突然、福岡教育大学附属小倉小学校へ転出する命令が出た。恩師の校長は「男なら附属へ行って勉強してこい。歳をとってから力のないことを後悔するより、若いうちに思い切り勉強してこい。長くいる必要はない。5年でよいから」と私を説得した。家族は大反対であった。なぜなら、家族をあげて小倉へ行けないからである。家のこと、家内の勤めのこともあって、単身赴任だからである。

車で通勤してみたが、片道1時間半、往復3時間も通勤していたら、勉強ができない。それで、学校のすぐ近くに下宿し、「土帰月来」の生活することになった。大きな転機であった。

### ②第1回の研究授業

新入教官は、4月中に3回の研究授業をすることになっていた。4年担任だったので、地域の教材を取り上げなければならない。小倉の地名さえもよくわからない中、1回めの研究授業をした。

批評会は、子どもが帰ってからの4時に始まり、

夜の10時まで続いた。はじめのうちは反論していたが、やがて一言も言えなくなった。

大先輩が「今度の新人は、何もわかったらん。何も知らずに附属に来ている。単元の意味も知らん。これじゃ話にならん。今日、出された宿題をしっかりと勉強して、来週もう1度やってもらうことにしよう」ということでようやく終わりになった。ホッとした。同時に涙がボロボロ出た。

司会者に「お礼くらい言ったらどうですか」と言われて、慌ててお礼を言った。終わったとたん、司会者が「有田さん、酒飲みに行くぞ!」と元気よく言うのである。私は「酒なんか飲めるか」と言いそうになった。しかし、声は全く反対に「はい」と言っていた。

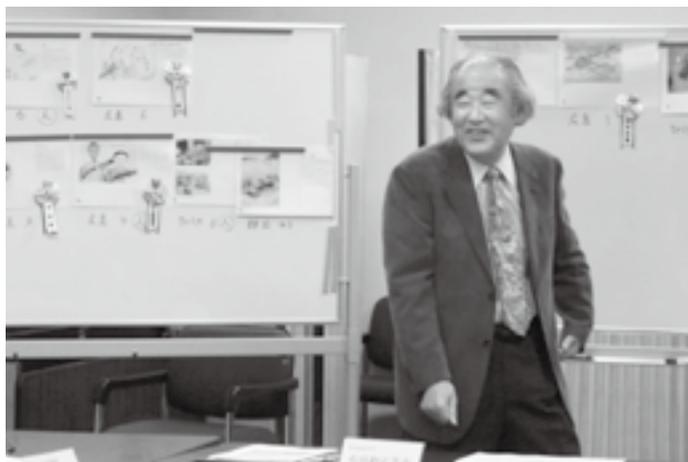
第2回研究授業も徹底的に叩きのめされた。完膚無きまでに叩かれ、完全に自分を見失ってしまった。今まで何をしていたのだろう。今までやっていたのは授業ではなかったのか。教育ではなかったのかと、悔しくて、涙にくれた。

そして、何を、どうすればよいのかわからなくなった。2回めの研究会の終わり頃「君は附属には無理のようだ。下宿の荷物をくくって、あした帰ったらどうか。その方が君のためだよ」とまで言われた。「はい、帰ります」と言いそうになったが、ぐとがまんした。

若い教師から、「これ、社会科の指導案ですか。まるで落書きじゃないですか。どこに社会科の内容があるのか言ってください」「あれが社会科の授業なら、遊んでいた方がましですよ」などと、さんざん悪態をつかれ、自尊心も何も無くなってしまった。全く裸にされてしまったのである。

### ③3回めの研究授業

もうプライドも何もなかった。自分に今できることをやるしかない。産炭



毎年、教育出版主催「地球となかよしメッセージ」審査委員長を務める(2012年)



資料で埋もれる仕事部屋。書籍や資料は、4箇所に分けて保存。

地の人々の生活が、しだいにひどくなっていることを教材にした授業をした。今までのように肩肘張ったことは何もなく、自然体になっていた。

研究会の終わる22時頃、たった一人「ようやく社会科らしくなった。これなら、6月の研究会の時に授業してよからう」と言った。

6月の研究会が終わると4回目以降の研究授業が待ち受けていた。する方も大変だったが、これを見て叩く方も大変だったと思う。今は「感謝」の気持ちで一杯である。よくぞここまで鍛えてくれたものである。

私は、今でも「実力とは何か?」と考えている。叩かれて裸にされ、新しく創り出したものでなければならぬ。私の現在があるのは、この附属小倉小時代があったからだと思っている。

## 5 私の授業を求めて

昭和51年4月、今度は東京の筑波大学附属小学校へ転勤になった。今度は、家族をあげて一緒に住める。

4月1日、事務室に行き書類を書いていると、先輩らしき先生が「君、名前は何と言うのか?どこから来たのか?何歳じゃ」と問うのである。「40歳です」と言うと、「40にもなって何しに来たんじゃ」と言う。「勉強しにきました」とこたえようと、「せいぜい頑張るんじゃない」と軽蔑したよ

うに言った。

これを聞いて、この附属も大変な所だなど、赴任の日に思った。「努力と挑戦」することは、小倉時代に身につけた。これをもとに勝負するしかないという覚悟を決めた。

筑波附小は、小倉のように厳しく叩くことはなかったが、「もういい。そのくらいでいい」と言っていて、最後まで答えさせない厳しさがあつた。

学校には『教育研究』という月刊誌があり、毎月のように書かねばならない。明治図書からも執筆依頼がくるようになり、新しい実践をしないと書くネタが無くなる。必死で新しいネタ作りに励んだ。これが800を超えるネタになった。

新しい教材を次々に開発せざるを得ない環境に追い込まれた。しかし、小倉時代と違って楽しかった。私の性分に合っていたのだ。

苦しいながらも仕事を楽しむコツを身につけていった。先輩は、幅広く勉強させるため、「テスト作り」や「参考書執筆」の仕事させてくれた。教材研究の間をぬって、これらの仕事を楽しんだ。といっても、しっかり調べ、間違いのないようにしなければならぬので大変だった。部屋は本の山になった。

教育出版の教科書の著者にもしていただき、「自分の書いた教科書を使って授業したい」という夢がかなった。うれしく、有難いことであった。

そのうち、講演の依頼が来るようになり、この準備や話し方の工夫もせざるを得なくなった。先輩は言った。「授業ができて、文が書け、上手な話ができる。これが三拍子そろった教師だ。それを目ざせ」と。

とにかく、授業をして、それを書いて、話をして「私の授業」を創り出していった。著書は、現在185冊になった。書いて自分の考えをまとめ、自分を創ってきたようだ。

参考図書 『社会科教師 新名人への道』 有田和正 (明治図書)

# 総合は本当に大変!?! ~本質を考える授業研究からの提言~

北海道函館市立磨光<sup>まこう</sup>小学校教諭

阿部 智

## ■ 課題提起

### (1) 総合的な学習の時間に対する「視線」

私は、総合的な学習の時間（以下、総合）が性に合っている。総合の授業を考えると、自然と子どもに対する思いも熱くなる。私は、私と同様の思いを感じてくれる人を少しでも増やしたいといつも考えている。そんななかで、「総合って本当に大変!」という声を聞く。大変さを感じる理由は、いろいろあると思うが、私は、「大変」という感覚を総合とセットで捉えられ、それが創設からこの10年で定着しつつあるのではないかという危惧を抱いている。「大変」という言葉で、先生方が見なければならぬものを見ることができていない現状を変えるために、どのような手立てがあるのか整理したい。

### (2) 疲れる総合からの脱却！課題3点の提起

#### ①年間指導計画の繰り返しがマンネリ化を招く？

各学校で作られている年間指導計画を毎年繰り返し扱くと、学習がマンネリ化するとされる。しかし、果たしてマンネリ化の原因は、同じ「年間指導計画」を使うことにあるのだろうか。毎年、新しい題材を探すのは大変だ。全国の先進校では、毎年見直しをかけた常に新鮮な題材を提供できるよう努力されているが、我々のような普通の学校では現実的に不可能に近い。だからといって適当に題材を選び、地域の特色を生かさないのは、子どもの学びの切実感をもたせるという観点からもよくない。しかも、同じ題材を繰り返すことでの形骸化は避けなければならない。私は、「形＝年間指導計画」を変えることを重視するよりも、「中身＝児童の実態」に応じた学びを実現させることの方が大切だろうと考える。年間指導計

画は、地域や学校の実態、子どもの切実感にあった題材であるはずなので、これをいちいち変更してしまうのは実に惜しい。要は、学ぶ児童の実態に、題材を再構築できるかどうかの問題なのである。他教科のように、どんな子どもにも当てはまるような「教科書」的に年間指導計画を当てはめてしまうことで、結局子どもの思いと授業が乖離してしまうのではないかと考える。

#### ②イベント的総合のイメージからの脱却！

総合は、何か壮大なことに取り組まなければならないということではない。「お祭り」的授業ではなく、地に足の着いた授業を旨とする。学習対象への子どもの心理的な距離を意識し、「もの」として残す授業より、子どもの「心」に残す授業を旨としたい。

総合の先進的な授業のイメージとして、発表会を催したり、行政に陳情したりするなど通常の授業とは、あまりにもかけ離れた取り組みに目が行きがちなので、「大変さ」のイメージが付きまとう。私は、小学校段階では、最終的に子どもがさまざまな活動のふり返しを通して思考を深め、“自分たちはどうあるべきなのか”を考えることができればいいのだ



学習終盤での各グループの発表

## 平成22年度ふるさと学習のまとめ

### 第5学年

**1. 単元名** 「みなみかやべの特産品の商品開発」

**2. 実施時期** 6月～12月

**3. 実施可能な時期** 前浜学習事前指導時期～

#### 4. 複線化による子どもの学習課題

- 地域の海資源について
- 地域の海産物について
- 地域の海産物を使った商品について
- 地域の海産物の商品開発について

#### 5. 活動場所・情報収集先

- 漁業組合 → 南茅部の海資源や漁業の実態について講演可  
→ 海産物や商品開発についてインタビュー可
- 南茅部こんぶ加工センター → 商品開発やそれにかかわる人々の思いについて  
→ 工場見学可
- 川汲・尾札部各漁組購買所 → 商品について調査依頼可
- 地域内水産加工会社 → 商品開発についてインタビュー可

#### 6. ゲストティーチャー

「こんぶ土居」さん(土居成吉さん・京子さん)→大阪府在住

#### 7. 教材・資料等で活用したもの

- インターネット
- パンフレット
- 海産物など実際の商品

#### 8. 事前に用意すべきもの

- 模造紙
- 水性マジック
- 写真(NHK放送体験クラブに申し込む場合)

#### 9. 授業者から

- ・地元で採れるこんぶやそれを活用して作られる商品について、それにかかわる人々の思いや願いを中心に学習を進めた。
- ・子どもたちは、南茅部のこんぶについて、その価値について気付き、そこから地域を盛り上げていきたいという思いをもつことが出来た。

と思う。

イベント的活動を否定はしない。むしろ、それが、子どもの探究的な学びの結果、切実感によって導き出された活動であればよいのだが、その結果を目ざすための総合になっては意味がない。イベントを追い求めれば、物理的取り組みが膨大に増える。手間も苦労も相当のものになる。しかし、心理的距離を追い求める総合は、児童の思考の流れを重視するのだから、その結果の取り組みならば「大変」という意識は、それほどもたないのではないだろうか。

繰り返すが、形あるものを残すことが総合の目的ではなく、子どもに何かを残すことを目的に授業を構築することこそが、大切なのだといつも考えている。

③総合の大変さは、総合への不安から？ルーチンワーク化した総合からの脱却！

先生方が言う「大変さ」は、時にはどのようなことに取り組みばよいのか、見通しがない「不安さ」と同義になることもあると思う。日々の授業作りの大半は、教科学習についてである。学習内容が定められており、指導方法も確立されている。先生方には、<sup>よ</sup>る<sup>べ</sup>となる指針が「教科書&指導書」という形で存在する。総合も、そういう視点での授業作りになってはいないだろうか。ここ数年、研究会等に参加していると、何かしらの「画一化した枠組み」のようなものに、総合の授業を合わせようとする動きを感じてならない。その枠組みは、教

科の授業を構成している「枠組み」と似ているような気がする。私は、総合は学習の「場」であり、教科のような知識の習得・活用訓練システムとは、質を異にすると意識的に理解している。さまざまな先生方の話を伺っているうちに、なんだか「総合的な学習の時間」ではなく、「総合科」の授業作りを目ざしているように感じてならない。総合に教科書がほしいという話を聞く。これは、教科化の第一歩ではないのか。つまり、先生方がその「枠組み」化を感じ取り、その方向に無意識的に従っていくという

安易な方向に流れていっているのではないか。総合は授業者の児童への思いと子どもの学びたいという思いが情熱的に絡み合っていく授業なはずである。総合の本質や特質に立ち返り、総合の授業作りを意識し直す必要がある。

## 目 実践から見える課題解決の糸口

### (1) 実践の概要

題材名「南茅部の昆布みなみかやべってすごい！」

対象児童 第5学年 28名

本実践を行った磨光小学校は海岸沿いにある。主に、大阪・京都など西日本に出荷されている「白口浜真昆布」の産地である。「昆布のまち」に生きる子どもたちの多くは、昆布漁の手伝いをしている。しかし、この基幹産業としての昆布が、全国的にどのような位置付けにあり、歴史的にどのような価値があるのかを知っている子どもは少ない。

子どもたちが、地元の漁師（家族）や、漁業協同組合の職員、昆布卸問屋の方（大阪）などとのふれあいを通して、身近にある昆布の本当の価値に気づき、昆布の生産や商品化についての探究を通して、「昆布のまち」に生きる自分たちは、地域のために何を考え、どう行動できるのかについて考える授業である。

### (2) 形骸化しない年間指導計画の活用法

本校の総合は、各学年「昆布」を柱にテーマが貫かれている。過去の文献を見ても、おそらく総合が創設されて以来、本校の総合は、「昆布」からテーマを変更した様子はない。年間指導計画は、各学校の地域の実態を豊富に生かした題材の集合体である。地域の特色を生かし、ひと・もの・ことが効果的に準備された「生きた枠組み」なのだとは考えている。

本実践を構想した際には、前年に取り組んだ実践の成果をしっかりと引き継ぎ、現在の児童の実態と



「こんぶ土居」さんとの交流

照らし合わせて、年間指導計画をもとに学習計画を構築していった。本校は、毎年、年間に取り組んだ総合の実践について研究集録にそのまとめを掲載している。そこに記載されている内容は、実に簡潔な内容となっており、実際に実践する立場になったときに確実に必要な情報（人材活用、見学先、児童の学びの傾向等）が盛り込まれている。このように、伝統的に情報伝達が積み重ねられているので、次年度実践する際は、かなり見通しをもって取り組むことができる。しかし、このままだと「形骸化」についての不安は払拭できない。私は、ウェビングを活用して、児童実態の徹底的な把握を行った。子どもたちがもっている昆布に関する知識等や、どのような思考傾向にあるのか、その整理分析を子どもたちと共に行った。そうすることで、伝統的に繰り返されてきている指導計画も、現在学んでいる子どもたちに合わせたものに調整することができる。この児童の実態調査をおろそかにしないことが、形骸化を避けるポイントだと考える。

### (3) イベント的综合から心に残る総合へ

私は、本実践の指針として、子どもたちには昆布についての探究的活動を通して、自分たちが生活する地域について「自分なりの考え」をもってほしい、

## 総合は本当に大変!?～本質を考える授業研究からの提言～

と考えた。つまり、昆布にかかわる人々とのふれあいを通して地域的課題を見出し、それを解決しようと思える活動のなかから、地域を見直す「視線」をもってほしいと願ったのである。

次節で述べるが、本実践にかかわりいくつかの見学や交流などの活動が予定されている。そうすると、それらの活動をこなすことで精一杯となり、その活動そのものが学習の最終目標となってしまうがちになる。また、総合のイメージとして、発表しなければならない、解決しなければならない、解明しなければならない、報告しなければならない…という固定観念があるのではないだろうか。これらは、ひいては発表方法の育成、整理分析の仕方の育成、発表物の作成方法や話形の指導の目的化につながりはしないだろうか。私は、イベント的総合のイメージを引き起こすこのような事態が、先生方の言う「大変さ」につながっているのではと考えている。

そこで私は、各活動を「心に触れること」を共通テーマとして設定し、見学することや体験することの重要度を薄め、その代わりに、そこで働く人々の「思い」に触れることの大切さを強調することにした。

そうすると、子どもたちの思考も、あんなものがあつた、こんなことがあつたという報告会ではなく、こんな思いでがんばっている人がいたんだ、という思考ができるようになっていった。

また、今回の実践では、各教科で学んだ知識や技能を生かすことを念頭におき、総合の時間で新たな技能習得を計画の段階から入れることを避けた。子どもたちが活動をしていくなかで自然と疑問に思ったり、必要に迫られたりしたときに適切なアドバイスをする程度にとどめた。このことにより、指導者としての負担はずいぶん軽減されたし、子どもたちの学習の流れもとてもスマートになった。

### (4) バラバラな活動を再編成する総合的な学習の時間

本校では、昆布について5学年がかかわる活動がいくつか用意されている。これらの活動は、どれも

### 5学年に予定されている昆布に関わる活動

前浜学習 (海浜学習)	漁業協同組合理事の話 (事前に質問を送り、それに沿った話をしていただく)
昆布加工センター 見学	職員に商品開発への思いを聞く
食の学校	十数年前から本校に南茅部の昆布のすばらしさを伝えに来る大阪昆布問屋店主との交流

単発で、その結果どんな成長を子どもたちに期待しているのかが曖昧であった。私は、昆布にかかわるこれらの活動を、1つのストーリー性をもたせた学習活動に再編成することにした。つまり、バラバラな活動に、ある一定の価値を与え、それらを子どもたちが探究的に活動することで、1つの目標を目ざすよう工夫する。このことで、単に調べることで終わったり、知ることで終わったりするのではなく、そこから地元の昆布について、今まで気付くことのなかった価値を導き出す学習に生まれ変わらせることができた。

## まとめ

総合では、児童への指導観が問われていると思う。総合の授業研究は、教科に対する授業開発や改善にもつながる。総合に対する見方の変化は、教育観の変化に通ずるのではないだろうか。総合を捉える土台を今までの教科的土台からはずすこと。「子どもをどう育てたいのか」というもっと根源的な土台から総合を見れば、「大変」という思いから脱却できるはず。中学校・高等学校の実践が更に進めば、自ずとその比較から小学校段階で求められる総合の学びが浮かび上がる。総合の先行実践はどれもすばらしいが、なかには小学生では荷が重い授業も多い。10年が経過し、もうそろそろ総合も「充実期」への転換を図ってもいいのではないだろうか。子どもたちが生きている足元をしっかりと見据える授業をこれからも考えていきたい。

# 単元カリキュラム ワークショップを校内研修

～その必要性と可能性～

東京都杉並区立杉並第八小学校主幹教諭  
畝尾 宏明

## ■ あなたの学校は大丈夫？

平成15年に「総合的な学習の時間のより一層の充実」が出されて、10年が経つ。この10年間のあいだに、総合的な学習の時間のより一層の充実は図られただろうか。確かに、充実した部分も多くある。しかし、各学校の状況をそれぞれに見てみると、決して楽観できる状況にないのではないだろうか。

平成20年1月に出された中教審答申では、「総合的な学習の時間の実施状況を見ると、大きな成果を上げている学校がある一方、当初の趣旨・理念が必ずしも十分に達成されていない状況も見られる。」「補充学習のような専ら特定の教科の知識・技能の習得を図る教育が行われたり、運動会の準備などと混同された実践が行われたりしている例も見られる。」と苦言を呈している。

## □ あすの授業に困らない単元作りから

「3年生の担任になったけど、何をやったらよんだらう」「福祉で30時間と計画されているんだけど、まず何からするの」「探究的な学習っていうけど… 実際どうやるの」

4月当初、職員室の中で聞かれそうなつぶやきである。全体計画や評価規準も大切だが、何よりもまず着手しなくてはならないのが単元カリキュラム作りである。一定の単元ができあがっていたとしても、はたして、探究的な学習になり得ているのか、身につけさせたい力が身につくように計画されているのか、子どもにとって身近で切実感のある題材となっているのかという視点で見直してみると、満足のいく学校はそう多くないのではないだろうか。

そこで、校内研修で行う単元カリキュラムワークショップである。このワークショップは、なにより、○あすの授業に困らない、○学校全体で共通理解が

得られる、○誰がどの学年の担任になってもある一定の実践が行われる、という利点がある。

## □ 校内研修で取り扱う意義

「本校の児童をこんな子どもに育てたい」「こんな力を育ませたい」「学区のよさを題材にできないか」「地域の中に、こんな人がいる…」といったことは全て、総合的な学習の時間の単元を作る上で必須の事項となる。しかしこれらは、その学校でしかわからないことでもある。

総合的な学習の時間は、その創設の趣旨より、一貫してスクールカリキュラムの学習として位置づいてきた。現行の学習指導要領においても、「第1の目標を踏まえて、各学校において目標と内容を定める」ことになっている。しかも、教材となる学習対象や身につけさせたい力、評価観点、校内体制にいたるまで各学校の裁量によるところが大きい。

ここに校内研修で行う意義がある。自校のカリキュラムを組むには、自校での研修が最も適しているのである。

## □ ワークショップの事前準備

### (1) 事前調査表の記入

単元カリキュラムを作成するにあたり、事前調査を行う。これは、担当学年など、実際の指導者に記入してもらうことが望ましい。事前調査では以下①～⑧の基本情報を記入してもらう。

- ①学年 ②実施時期○月～○月 ③予定指導時数
- ④学習課題（国際理解、キャリア、まちづくりなど）
- ⑤学習事項（この学習で学び取って欲しいこと）
- ⑥この学習で身につけて欲しい力（自校の評価観点）
- ⑦この学習で目指す児童像
- ⑧活用したい人材やもの、活動などその他、基本情報

# でやろう

この際、④や⑤を記入する際は文科省資料『今、求められる力を高める総合的な学習の展開』（平成22年11月）－各学校において定める内容－（p71～73）を参照にしながら行うことが望ましい。

記入にあたっては、わかる範囲でかまわず、あまり、きちんと書き込まなくてもかまわない。私は、この事前調査票をもとにパワーポイントを作成し、ワークショップの説明に活用している。

## (2) 班編制

ひと班、3～4人程度になるように班を編制する。班ごとに違う単元カリキュラムを作成することもできる。なるべく多様な立場の先生方で構成するのが望ましいが、各学校の実態に応じてワークショップの指導者が考えるとよい。ひと班ごとに作業台としてのテーブルがあるようにしたい。

## (3) 準備物

ワークショップを行うのに必要なものは、以下のようなものである。

- パソコン・プロジェクター・スクリーン…各1
- 中マジック(名前ペンくらいの太さ)黒…人数分
- 付箋紙大(75×75mm)…一束
- 付箋紙中(75×50mm)…人数分×4分の1束くらい
- 黒板につくマグネット…適量
- 小さい丸いシール(色自由)…人数分×4分の1枚
- 各学年の教科書(国語 算数 理科 社会 生活)
- 単元計画シート(模造紙に探究的な学習プロセスを書き込んだもの)…ひと班に1枚

## 回ワークショップの実際

ワークショップは2時間程度を予定する。参加者の実態に応じて、この時間は変化する。ワークショップは前半と後半に分かれて行い、前半は主に講義形式、後半は主に演習形式の形をとった。

前半の講義では、ワークショップ指導者が総合的な学習の時間の基本的な考え方、新学習指導要領のポイント、実践事例の紹介などを行う。特に、探究的な学習プロセスである「課題の設定」→「情報の収集」→「情報の整理・分析」→「まとめ・表現」→「課題の設定」…のサイクルが単元の中において何度も繰り返されていく様子をこの部分ではきちんと説明しておく。その時に前出の文科省資料の－探究的な学習における学習指導－（p19～45）を活用し、それぞれの探究的な学習プロセスにおけるツールを紹介していく。なお前半部分は各学校の実態や参加者の実態に応じて軽重をつけて行いたい。そしていよいよ、ワークショップの後半、演習に入る。

## (1) 具体的な活動を短冊に書く(約15分)

事前に記入してもらった事前調査表をもとに、今回作る単元の基本情報を共有する。次に、具体的にできそうな学習活動を短冊に思いつくだま書き込んでいく。短冊には、付箋紙中を使い、横につなげてひとつの短冊とするとよい。ひとつの活動を一枚の短冊に書くようにする。ワークショップ参加者には、

- 学習事項を意識して活動を考えてください
- 活用できそうな素材・財を活用してください
- 今までの経験値(本校歴)なども存分に発揮してください
- 紹介したツールを活用してみてください
- その活動に必要な大まかな時間数も書いてください

という指示を出す。なお、短冊に書くときは話し合いをせず、黙々と各々の考えのもと、短冊にいくつも学習活動を書いていく。



▲具体的な学習活動を書く

## (2) 短冊をシートに貼っていく (約45分)

短冊がある程度 (一人5枚程度) 書いたら、次のステップに移る。ここでは、おしゃべり解禁である。短冊を単元計画シートにたくさん話し合いながら貼っていく。参加者への指示は、以下のとおりである。

- 児童の思考の流れ、思いや願いを意識して順番を考えてください
- 複数の活動が同時にあってもかまいません
- 足りない活動は、その都度付け足してください
- 単元の学習段階が見えてきたら、線を引いてください(段階ごとのテーマを書いてもよいです)
- シートの最後まで探究のプロセスがなくてもかまいません



▲各班に積極的に入る

この時、ワークショップ指導者は積極的に各班の話し合いに入り、指導助言を行う。なぜなら参加者の中には、探究的な学習プロセスがまだ具体的にイメージできていない人もいたり、書かれた短冊を全て使わないといけないと思ったりしている人がいるからである。

探究的な学習プロセスがイメージできていない人は、「アンケート」「インタビュー」「インターネットで調べる」など情報の収集や、「新聞に書く」「プレゼンをする」などのまとめ・表現の部分に偏りがある場合が多い。そんなときは、探究的な学習プロセスを再確認し、課題の設定や情報の整理・分析を考えて、短冊を書き足す作業も必要になってくる。

## (3) チェック項目に照らして見直す (約15分)

ある程度、単元計画ができあがってきたら、チェック項目に沿って自分たちの指導計画を見直す。チェック項目は以下の6点で設定した。

- 総合的な学習の時間の目標に沿っていますか
- 学習内容が学べる活動になっていますか
- 探究的な学習プロセスになっていますか
- 身につけさせたい力は身につきますか
- 指導時間数に過不足はありませんか
- 子どもたちの思いや願いにより添う「複線型学習」が可能ですか

指導時間数の過不足については、たいていの場合、予定の時間よりも超過していることが多い。これは、子どもの思いや願いを大切に、探究的な学習プロセスを丁寧に考えてきた結果である。15時間程度で、単元を組もうとするが、ワークショップを通してカリキュラムを組んでみると30時間くらいになってしまったということはよくある。こういった場合は、無理に時間数を減ずるのではなく、予定していた時間数を増やすことをおすすめする。

## (4) 各教科との関連を見出す (約15分)



▲教科書で関連を探る

単元計画シートに指導計画ができあがったら、次は各教科等の関連を見出していく。ここでは付箋紙大と、各教科などの教科書を活用する。受講者への指示は以下のとおり。

# 単元カリキュラム ワークショップを校内研修でやろう

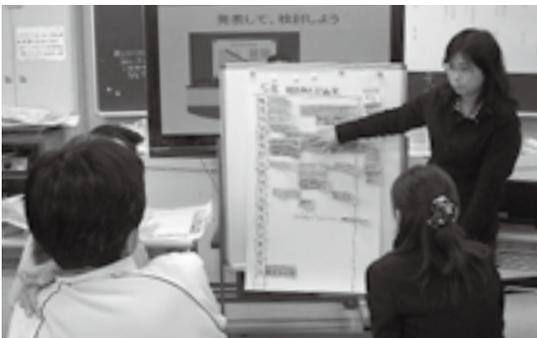
- 具体的な学年、教科、単元名を付箋に書いてください。(3年国語「インタビューをしよう」など)
- 「聞く話す能力」など、教科のねらいや資質能力でもかまいません
- 現在、既習・習得している関連だけではなく、今後、学習していく内容でもかまいません

社会科の教科書では、中学年の副読本教材（『わたしたちの〇〇区』など）が有効な場合も多い。地域の学習をする際によく用いられる教材があればこれも用意したい。このあたりになってくると、班ごとに進み具合が異なってくるので、その調整をしつつ、ワークショップ全体を指揮することが肝要である。

## (5) 班ごとに発表し合う (約15分)

最後は、班ごとに作成した指導計画をお互いに見合い、それぞれのよさを見出していく。この時、同じ単元を作った班同士で見合えると、そのよさや考え方の多様さが見いだせる。ここでは、小さい丸いシール（色自由）を使用する。このシールは「いいねシール」と呼び、賛同できる学習活動や、考え方にシールを貼っていく。その時、シールを貼る理由や、活動のよさを話し合いながら、シールを貼っていくと雰囲気がさらによくなっていく。

こうしてできあがった計画シートは、そのまま、単元指導計画として活用できる。職員室の端にでも貼り出しておくと、担当学年以外の先生方の協力も得られやすいだろう。



▲お互いに発表し合う

## ④終わりに

本ワークショップは、これまでに9校（研究会も含む）で実施した。そのうち、5校においてその効果をアンケートで測定した（下図参照）。

結果、ほとんどの項目において肯定的な回答が9割を超えた。また、「学習活動を思い描くことができた」「他教科、領域の学習で得た知識や技能を生かすことを考えることができた」「学習活動を学習段階に分けて考えることができた」など、参加者自身もカリキュラムデザイン力が身につけていることを実感していた。「これほど総合の授業をやってみたいと思ったことはない」といった声が聞かれることから、実際の授業に生かせる点にこのワークショップの最大のよさがあると考えられる。そしてなにより、参加者がどんどんと笑顔になっていくのが印象的であった。

このような手法が、今後たくさんの学校で展開され、総合的な学習のより一層の充実が図られることを期待してやまない。ぜひ、各校で改善を加えるなどして活用してもらいたい。

## ワークショップのアンケート調査結果

		回答率		肯定 回答率
①	学習内容	よく理解できた	50%	100%
		理解できた	50%	
	学習内容の指導	できると思う	44%	78%
		どちらかといえば指導できると思う	34%	
②	学習段階	よく理解できた	55%	97%
		理解できた	42%	
	学習段階の指導	できると思う	44%	94%
		どちらかといえば指導できると思う	50%	
③	探求的な学習過程	よく理解できた	53%	95%
		理解できた	42%	
		できると思う	47%	97%
		どちらかといえば指導できると思う	50%	

# 「子どもたちの学習意欲を引き出す5つの ～プロジェクト学習の実践から学んだこと～

熊本県菊池市立迫水小学校教諭

富永 泰寛

## ■ はじめに

10年ほど前「次の総合楽しみだね。何をするのかな。」という言葉で、子どもたちから何度も聞いてきた。当時、その言葉を聞くと嬉しくなっていた。「総合的な学習の時間」が始まった当初、「外国語活動・情報・環境・福祉」に関する授業がいつでもできるように、さまざまな教具（英語CD・ビデオ、UD製品など）を準備していた。これらの教具のおかげで、子どもたちは楽しく学習することができたようである。私自身も、何の不安もなく授業を進めることができていた。しかし、何か違う気がしていた。子どもたちの笑顔の裏にある何か足りない気がしていた。確かに、子どもたちは学習の中で課題を見つけ、自分たちで考え活動していたはずである。でも、どこか子どもたちが主体的に活動しているようには見えなかったのである。そこで、「プロジェクト学習」を中心とした取り組みを展開していくことにした。その結果、「次の総合楽しみだね。今度はこの前の続きをしよう。」などという言葉をよく聞くようになっていったのである。自分たちで次の課題を決め、学習を進めていこうとする様子が見られるようになったのである。

今回、「プロジェクト学習」を進めるにあたり、どのような方法で学習意欲を持続させていったらよいのか、実践を通してわかってきたことをまとめた。

## □ 実践の共通視点

過去数年間にわたり、以下のような「プロジェクト学習」を進めてきた。

- ① 和菓子プロジェクト…老舗の和菓子メーカーと協力し、デザイン・味・包装紙・価格・名前など全てを子どもたちが決め商品化する。

（益金は全額インドの小学校に寄付）

- ② 絵本プロジェクト…絵本作家と協力して、環境を守るための絵本を作成し、インドの学校にプレゼントする。
- ③ マイバッグプロジェクト…高校生と協力しマイバッグを作成する。企画・デザインを小学生がし、実際バッグにしたのは高校生。  
それら全ての実践に共通していることが、以下の2点である。

- (1) 一人一人が、最後まで諦めずに取り組めるような仕掛けを教師側から設定する。
- (2) さまざまな場面で、意図的な出会いの場を数多く設定する。

教師側からいかにアプローチし、子どもたちに学習意欲をもたせていくかが鍵となってくる。一見子どもたちが主体的に活動しているように見えても、その裏ではさまざまな仕掛けが必要であるということが実践をしていく中でわかってきた。また、長期的な取り組みをする中で、子どもたちの学習意欲が低下してくる際に、さまざまな物や人との出会いが必要であるということもわかったのである。さまざまな仕掛けと出会いで、子どもたちの学習意欲を持続することができたのである。その方法を大きく5つにまとめてみた。

## □ 子どもたちの学習意欲を引き出す5つの方法

### (1) ゴール地点に魅力を

学習を進めるにあたり、子どもたちに「調べてみたい」「やってみたい」と思わせるようなゴール地点の設定が重要になってくる。そこで、以下のような条件を入れることにした。

- ① 地域素材か今の社会情勢から考えたもの。

# 方法」

- ② 全員が協力してできるもの。
- ③ 形として残るもの。
- ④ 外部(ゲストティーチャー)との連携がとれるもの。
- ⑤ 子どもたちが驚く意外性があるもの。

特に、①の条件は必要である。突然降って湧いたようなものでは、子どもたちはのってこない。必ず、ゴール地点を提示する際には、「きっかけ」となる仕掛けが必要であると考えた。例えば「和菓子プロジェクト」の場合は、外国の方との交流会を設定し、互いの国の食べ物(お菓子)を紹介することにした。しかし、子どもたちには、日本のお菓子である和菓子に対する知識がない。「では、和菓子について学んでみよう。」というような手順で、和菓子と子どもたちをつないでいったのである。当然、この企画の裏では、地域の老舗和菓子店との企画の確認や、外国の方との打ち合わせなども事前に済ませておくのである。そして、最終的には「和菓子の商品化」のために、全員が協力して進んでいくという場を提示し、子どもたちの意欲を引き出したのである。子どもたちは「自分たちが考えたものが商品化されるなど絶対に無理」と思っているが、そこに意外性や驚きが出てくるのである。ゴール地点をいかに魅力的にもって行くかは、教師一人一人の教材開発に対する意欲が必要となってくる。つまり、教師自身が「自分が子どもだったら楽しい。おもしろい」といった感覚で地域にあるものに目を向けるだけで、さまざまなものが教材となってくるのである。

## (2) 調査活動の手順を明確に

ゴールが決まったのであれば、そのゴールへ進むまでの過程を明確にしなければならない。つまり、ゴール地点からスタート地点へ戻しながら、何が必要なのか、何を



▲企業の方との交渉

すればよいのかなどを一つ一つ確認していかせるのである。すると、子どもたちにとってわからないことが必ず出てくる。そのわからないことを分担し調べさせるのである。この調査活動をする際に気をつけていたことが、以下の5点である。

- ① 一人一つのテーマを決定させ、何を調べ、どのようにまとめるのかを明確にする。
- ② 一人での調査活動をさせた後、小グループの調査活動へつなげる。
- ③ インターネットを使わず、先に書籍、辞書、図鑑などを使わせる。
- ④ 小学校低学年にもわかる文章に直させる。
- ⑤ 数値に注目して調べさせる。

例えば、「環境に関する絵本を描きたい」という課題に取り組むとする。そのためには「現在の環境問題の現状、その原因、対策」などの環境に対する知識や「絵本の作り方、どんな絵本が好まれているのか、今の絵本の流行」など、絵本に関する知識も必要となってくる。これらの課題を、一人一人が分担し、徹底して調べさせるのである。

この際、「その分野の専門家になれるくらい調べましょう。」と声をかけるのである。専門家

をたくさん育てることで、その後の

主体的な活動につながってくる。

また、調査活動をさせる際には、すぐにインターネットではなく、書籍や図鑑から入り、関係団体への連絡など人的情報源を経てからさせるようにしてい



▲商品化された和菓子

る。さらに、調査内容をまとめる際には、「調べた本の名前（ネットならばURL）、出版年、著者名」を記録させ、短文でまとめさせる（難しい言葉は、国語辞書を使わせながらまとめ直させる）。さらに、数値（大きさ、値段、気温の変化など）にも気をつけさせながら、調べさせていくことで、その後の発表につながることも伝えていった。これらの活動を通して、最終的には中間発表（調べた内容の紹介）をさせていく。この際、プレゼンテーションソフトの活用や紙芝居、ポスター形式など、相手に伝わりやすい方法を選択させ発表させていく。発表させることで、専門家の情報を共有させたり、足りない箇所を確認させたりしていくのである。これらの活動後、小グループに分かれるようにすることで、一人一人が責任をもった行動をとるようになるのである。



▲高校生との意見交換

### (3) 失敗体験をさせる

子どもたちを成長させるためには、大変な思いをさせる必要があると考えている。成功体験は当然であるが、それ以上に、失敗体験や追い込まれる体験、責任を果たす体験などが必要であると考えている。この体験を通して、自ら考えたり、他の子どもたちと協力したりするようになってくる。最終的に乗り越えた後の喜びや嬉しさは、忘れることができないはずである。その視点を3つにまとめてみた。

- ① 意図的に体験させる。
- ② 発表を通して体験させる。



▲街頭アンケート

### ③ 教室外で体験させる。

このことを「マイバッグプロジェクト」を例に挙げて説明する。「アンケート作成の際、自分で考えてきた内容が採用されない（一人10個作って、全体で数百となる。その中から10個選択するため）。街頭でアンケートをしても断られることがある。一人一人が調査内容から懸命に考え、プレゼンを作成し、自分のアイデアを発表しても選ばれない（投票で3つに絞り込む）。さらに自分の考えを捨てて、他のデザインに協力し、最終プレゼンを行うが選ばれない（投票で選ばれるため）」と最後に選ばれたデザインを、全員が協力して一つの形にするまでの過程で、いくつもの大変な思いを味わうのである。しかし、これらの経験を踏まえながら、乗り越え方を少しずつ学んでいき、最後一つの形になったときに大きな喜びを得ることができるのである。いろいろな場面で、意図的に、ほんの少しだけ壁を作ることで、その後の活動にも変化が生まれてくるのである。

### (4) 緊張場面を設定する

学習活動に長い時間をかけて取り組むと、どうしても間延びしてしまう。そこで、適度な緊張感を与えることで、子どもたちの意欲が変わってくると同時に、真剣みも増してくる。では、どのような形で緊張感を与えていくのか以下の3つの方法をとることにした。

- ① 発表場面の設定及び評価

## 「子どもたちの学習意欲を引き出す5つの方法」

### ② 期限の設定

### ③ 第三者の活用

子どもたちの緊張感を高めるには、「発表」「評価」「初体験」が必要であると考えている。毎時間、個人やグループに「今日はどこまで進んだのか」を簡単に発表させる。その内容によっては、指導を加えていかなければならない。さらに中間発表などを繰り返すことで、互いの情報を知るだけでなく、まとめ方や発表の仕方などを学ばせることもできる。よくできている子を真似させたり、発表に対する質問をさせたりすることで、一人一人の調査の未熟さにも気づかせるのである。また、街頭でのアンケート調査や他校との交流での発表など、初めて経験する場面を取り入れていくようにする。どれも、実施時期を事前に伝えておくことで、子どもたちは自ら考え、行動するようになってくる。

### (5) 出会いを大切にさせる

教室の中だけでは、子どもたちの学習意欲は停滞してくる。「物」「人」「環境」などさまざまな出会いが子どもたちを変えていくと考えている。特に「人」との出会いは大きな影響を与える。可能な限り、連絡をとりながら講師招聘をしていくようにした。この際、気をつけていたことが以下の3点である。

- ① 県内や地域の方でテーマに関係のある方を探す。
- ② 事前に直接会って、趣旨説明をする。

### ③ 子どもたちの要求に応えるようにする。

例えば、「絵本プロジェクト」の場合には、子どもたちから「絵本はどうやって作るのだろう」という質問が出た。そこで、県内在住の絵本作家の方を探したのである。子どもたちは、会えるはずがないと思っている人に会えると、意欲が増してくるのである。これまで、外国の方々、高校・大学の先生や生徒、各種関係団体の方々など、多くの方々に協力をしていただいた。学習を進めていくには、事前のネットワーク作りが必要であるということに改めて感じた。このためには、日頃から新聞、テレビなどの情報ばかりでなく、地域の方々との交流なども必要なのである。ほんの些細なことが、大きな教材になることがあるのである。

### 四 おわりに

これまで、さまざまなプロジェクトを行った。毎時間、子どもたちが、懸命に頑張っている姿を見ることができた。失敗して涙したり、最後の完成品を見て感動したりする姿を幾度となく見ることができた。本当に幸せな瞬間である。また、子どもたちは、総合的な学習の時間に、文章力、計算力、デザイン力、調べる力などさまざまな要素が組み込まれていることに気づいていったようである。このことは、日々の授業に取り組む姿勢の変化からもわかる。プロジェクト開始前と開始後では学ぶ意欲が大きく違っていたのである。

これらの意欲を引き出すためには、教師自身が、アンテナを張り、多くのネットワークを結んでいく必要があると考えている。子どもたちと同じように、自ら課題をもち、その解決のために考え行動することで、子どもたちの学習意欲は変わってくる。これまで、多くの企業や団体などが協力してくれて、プロジェクト学習を進めることができた。心から感謝をしている。これからも、一人でも多くの子どもたちの意欲を引き出す方法を考えながら、授業実践に努めていきたいと考えている。



▲絵本作家の方との授業



## 生活科・総合的な学習

# 感動ドラマを創る 子どもたち



ドラマが誕生し進展する過程は教師にとって感動的であり、  
素敵な子どもの姿を見いだす瞬間となる。  
まさに、教師冥利につきる瞬間である。  
本書にはそのような子どもたちの姿が溢れている。



寺崎千秋 編著

A5判 / 216 ページ / 定価 2,310 円 (2,200 円 + 税)

生活科・総合通信 そよかぜ通信 [2013年 春号] 2013年3月29日 発行

編集：教育出版株式会社編集局  
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社 代表者：小林一光  
発行所：教育出版株式会社  
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 電話 03-3238-6864(お問い合わせ)  
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



### なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

- |       |           |   |
|-------|-----------|---|
| 北海道支社 | 〒060-0003 | 札幌市中央区北三条西3-1-44 ヒューリック札幌ビル6F<br>TEL: 011-231-3445 FAX: 011-231-3509          |
| 函館営業所 | 〒040-0011 | 函館市本町6-7 函館第一生命ビルディング3F<br>TEL: 0138-51-0886 FAX: 0138-31-0198                |
| 東北支社  | 〒980-0014 | 仙台市青葉区本町1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル7F<br>TEL: 022-227-0391 FAX: 022-227-0395         |
| 中部支社  | 〒460-0011 | 名古屋市中区大須4-10-40 カジウラテックスビル5F<br>TEL: 052-262-0821 FAX: 052-262-0825           |
| 関西支社  | 〒541-0056 | 大阪市中央区久太郎町1-6-27 ヨシカワビル7F<br>TEL: 06-6261-9221 FAX: 06-6261-9401              |
| 中国支社  | 〒730-0051 | 広島市中区大手町3-7-2<br>あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル5F<br>TEL: 082-249-6033 FAX: 082-249-6040 |
| 四国支社  | 〒790-0004 | 松山市大街道3-6-1 岡崎産業ビル5F<br>TEL: 089-943-7193 FAX: 089-943-7134                   |
| 九州支社  | 〒812-0007 | 福岡市博多区東比恵2-11-30 クレセント東福岡 E室<br>TEL: 092-433-5100 FAX: 092-433-5140           |
| 沖縄営業所 | 〒901-0155 | 那覇市金城3-8-9 一粒ビル3F<br>TEL: 098-859-1411 FAX: 098-859-1411                      |